

〔論文〕

## 保育者養成におけるチーム制実践的演習授業について(2)

芝田圭一郎・大嶋 健吾

### 1. はじめに

本稿は2017年3月に発表した「保育者養成におけるチーム制実践的演習授業について(1)」<sup>1)</sup>に引き続き調査研究である。本研究では「保育の質の向上」という課題に着目し、保育者<sup>2)</sup>養成校での保育の質を向上させる授業の運営について研究している。

筆者は2人とも保育現場<sup>3)</sup>にて保育業務の経験があり、保育現場について精通している。その経験を活かし、筆者2名が担当している「保育内容(総論)」という授業にて「チーム制」、「模擬保育」の2点を主として授業を展開しつつ、保育者の質の向上につながる授業を目指している。この「保育内容(総論)」は大阪城南女子短期大学(以下、「本学」という)において2年生前期開講の半期科目である。本学では2年時の6月に「教育実習Ⅱ(幼稚園)」、9月に「保育実習Ⅱ(保育所)」、「保育実習Ⅲ(福祉施設)」<sup>4)</sup>の学外実習が実施されている。学外実習は保育現場に実際に赴いて学ぶ機会であるので保育者の質の向上につながったかどうかを検証するにふさわしい場である。よって全授業終了後、受講した学生にアンケートを実施し、学外実習への効果や卒業後の意欲等にどのような影響がでているかを調査した。

前回の調査では次の課題が浮き彫りになった。まず、6月での学外実習ではこの授業を活かすことができている学生が多かったので授業の一部を改善する。次に、アンケート調査において欠損値が17であったので、アンケート調査の質問内容に変更を加える。そして第三に、学生自身で模擬保育を実践することに対して困難や不安を感じる点を具体的に調査する。最後に、「チーム制」に対して学生の理解は低かったため、「保育観」に触れる機会を増やしていく。それぞれの改善内容は後述するが、二つ目のアンケート調査の内容は今回、あえて変更していない。というのもこの3年間での比較検討を行うため、質問内容に変更を加えず、全く同じアンケート調査を3回、実施している。また三つ目の困難や不安を感じる点を具体的に調査する件は、この科目が前期開講の半期科目のため、追跡調査や細かい調査をする時間がなく、実施できていない。また同様の理由で卒業していった過去の履修学生に対しても追跡調査を実施することが困難であった。この点に関しては大きな課題であるが、本稿は3年間の保育者養成におけるチーム制実践的演習授業の集大成とし、次年度に大きく変化・改善していくための足がかりとしたい。

## 2. 授業内容及びその展開

### (1) 授業内容の展開

ここでは「保育内容（総論）」の授業内容の展開について時系列に沿いながら紹介する。前述にもあるようにこの授業では「チーム制」と「模擬保育」の2点に着目しており、授業内容の展開についてもこの点を重視して進めている。その上で授業の主である学生の模擬保育実施の前に筆者2名による、それぞれが主担当となる模擬保育を計4回、学生に実施した。詳細については下記に記していく。40～50名程度で1クラス（全3クラス）編成となっており、模擬授業は14～18グループに実施し、1つのグループの模擬保育に与えられる時間は原則20分とした。

### (2) 筆者の模擬保育

学生の模擬保育実施前に筆者2名による模擬保育を実施した。模擬保育を実施する際には学生を子ども役としているが、実際の乳幼児のような反応や動き、言葉等を実践できるわけではない。また実際の保育現場においても乳幼児を35名以上のクラス編成をして、保育を実践することはまず、ありえない。よって実際の保育現場からはかけ離れている点もある。今回はそういった点は不問とする。保育内容としては、リズム活動、体操指導、造形、室内ゲーム（宝探し）の4種類であり、全く同じ内容の模擬保育を各年及び各クラスにて行う。その際のポイントとしては①筆者2名は、子ども役の学生が複数の保育者による保育を体験することができるよう、主になり保育を進めていく主担と、サポートを主とする補助の役に分れて模擬保育を行う。②学生には各模擬保育対象年齢の発達過程を伝える、教材の使用等、他授業との関連性を意識できるよう努める。③必ず保育後の振り返りを学生へ講義という形で考慮する必要がある点を伝える。以上である。また前述の課題のように「保育観」に触れる機会を多くするため、振り返り等では筆者2名の「保育観」の違いを含め、説明する時間を多く設けた。

### (3) 学生の模擬保育

まず初めに学籍番号順に選ばれた学生同士が3～4名で1グループとなり、模擬保育の条件を決める所から取り組みが始まり、擬似複数担任制を構成する。PDCAサイクルを踏まえ、チームで保育内容を考え実施し、評価、改善していく形をとる。

模擬保育の条件と、①対象年齢（2・3・4・5歳）、②実施時期（1・3・4・7・9・12月）、③保育内容の種類（造形・室内ゲーム・リズム）、の以上3点をくじ引きにて決める。実施時間（20分）の中で3つの条件を踏まえた上で内容を考え、実習時に使用する保育指導案に記入する。模擬保育内容の立案を通して、保育観の相違等に近い関係性が学生同士の間でも生まれることとなり、現在の保育現場においても課題の1つである保育者同士の連携の難しさを実感することができる。ここまではPDCAサイクルにあてはめると、「Plan（計画）」の部分にあたる。

次に「Do (実施)」の部分である。立案した模擬保育を子ども役であるその他の学生に対して実施する。実際は大人である学生に対して行い、かつ本物の乳幼児ではないという困難な点はあるものの、子ども役の子には各年齢の設定保育時において見られるであろう動きを考えさせると共に、保育現場における「1つのクラス」という擬似クラスを構成し、出来る限り実際の現場に近い環境で模擬保育ができるよう配慮している。

模擬保育実施後には筆者2名が考察を述べる。この考察と実際に模擬保育を行った対象学生の考察を含めまとめる。ここが「Check (評価)」の部分にあたる。

今回の模擬授業では、各学年、各クラス14～18グループの模擬保育が行われ、設定された保育内容において必然的に類似性が見られることとなり、参考点があらゆる場面から出てくることとなる。子ども役として他の模擬保育から感じたこと、筆者や実施学生の考察等から担当する模擬保育へのヒントを探し出すことが、PDCAサイクル最後の「Action (改善)」の部分に相当する。

### 3. アンケート調査及びその内容

受講した学生に実施したアンケートを図表1で示す。他の調査研究のアンケートも兼ねているため、本研究では「Q13」からの質問事項が対象である。各質問項目における回答の数値は5段階で質問しており、数値が高いほど、肯定的な評価になっている。

図表1 アンケート調査用紙

## 「幼児教育・保育」に関するアンケート調査

■保育内容(総論)の講義に関して

専門性が近い2人教員によるチーム制のこの講義形式についてお聞きします。そう思う場合は高く、そう  
 思わない場合は低く答えてください。またその理由も簡潔でもいいのでおこたえください。

	5	4	3	2	1
●前半に実施した講義(座学)について					
13. この講義の内容はわかりやすかった	5	4	3	2	1
14. 講義の内容は自分のためになった	5	4	3	2	1
15. 講義の内容はとても活かせる	5	4	3	2	1
16. 講義の内容はとても参考になった	5	4	3	2	1
●教員が実施した模擬保育(1人2回ずつ、計4回)について					
17. 教員の模擬保育の内容はわかりやすかった	5	4	3	2	1
18. 教員の模擬保育は自分のためになった	5	4	3	2	1
19. 教員の模擬保育はとても活かせる	5	4	3	2	1
20. 教員の模擬保育はとても参考になった	5	4	3	2	1
●学生(自分以外)が実施した模擬保育について					
21. 模擬保育への助言はわかりやすかった	5	4	3	2	1
22. 他人の模擬保育は自分のためになった	5	4	3	2	1
23. 他人の模擬保育はとても活かせる	5	4	3	2	1
24. 他人の模擬保育はとても参考になった	5	4	3	2	1
●学生(自分自身)が実施した模擬保育について					
25. 模擬保育は簡単だった	5	4	3	2	1
26. 実施した模擬保育への助言はわかりやすかった	5	4	3	2	1
27. 実施した模擬保育は自分のためになった	5	4	3	2	1
28. 実施した模擬保育はとても活かせる	5	4	3	2	1
29. 実施した模擬保育はとても参考になった	5	4	3	2	1
●その他①					
30. 保育系の職に就くことに前向きになった	5	4	3	2	1
31. 実習に対しての不安が減った	5	4	3	2	1
32. 他の授業に対する気持ちが高まった	5	4	3	2	1
33. 他の授業の関連性を感じた	5	4	3	2	1



## 4. アンケート調査結果

### (1) 調査結果の一覧

図表2 年別回答数の比較

	回答数	有効回答数	回答の全体平均値	回答の全体中央値
2016年	121	104	4.20	4.20
2017年	116	110	4.19	4.28
2018年	145	122	4.24	4.34

図表3が全ての質問の評価数値を表した一覧表とそのグラフである。自由記述で答える質問項目は後述する。

図表3 年別評価数値の一覧表①(平均値・中央値・最頻値)

	2016年			2017年			2018年		
	平均値	中央値	最頻値	平均値	中央値	最頻値	平均値	中央値	最頻値
Q13	4.43	5	5	4.59	5	5	4.63	5	5
Q14	4.60	5	5	4.75	5	5	4.75	5	5
Q15	4.58	5	5	4.74	5	5	4.80	5	5
Q16	4.61	5	5	4.75	5	5	4.79	5	5
Q17	4.66	5	5	4.72	5	5	4.74	5	5
Q18	4.66	5	5	4.75	5	5	4.79	5	5
Q19	4.63	5	5	4.66	5	5	4.76	5	5
Q20	4.68	5	5	4.76	5	5	4.80	5	5
Q21	4.39	5	5	4.45	5	5	4.46	5	5
Q22	4.51	5	5	4.53	5	5	4.60	5	5
Q23	4.38	4.5	5	4.34	4	4	4.53	5	5
Q24	4.41	5	5	4.49	5	5	4.57	5	5
Q25	2.67	3	2	2.47	2	2	2.62	3	2
Q26	4.11	4	5	4.04	4	5	4.05	4	5
Q27	4.32	4.5	5	4.37	5	5	4.37	5	5
Q28	4.09	4	5	4.02	4	5	4.24	4.5	5
Q29	4.15	4	5	4.06	4	5	4.18	4	5
Q30	3.92	4	5	3.83	4	5	3.84	4	4
Q31	3.36	3	3	3.38	3.5	4	3.45	3	3
Q32	3.33	3	3	3.26	3	3	3.39	3	3
Q33	3.53	3.5	3	3.51	4	4	3.63	4	4
Q34	3.57	4	4	3.93	4	4	3.92	4	4
Q36	3.42	3	3	3.61	4	4	3.36	4	4
Q38	4.38	5	5	4.33	5	5	4.24	4.5	5
Q40	4.58	5	5	4.57	5	5	4.54	5	5

図表4 年別評価数値の一覧表②(各質問の回答者数とその割合)

2016年

	評価「5」の人数		評価「4」の人数		評価「3」の人数		評価「2」の人数		評価「1」の人数	
Q13	55	52.9%	39	37.5%	10	9.6%	0	0.0%	0	0.0%
Q14	67	64.4%	32	30.8%	5	4.8%	0	0.0%	0	0.0%
Q15	66	63.5%	32	30.8%	6	5.8%	0	0.0%	0	0.0%
Q16	68	65.4%	31	29.8%	5	4.8%	0	0.0%	0	0.0%
Q17	73	70.2%	28	26.9%	2	1.9%	1	1.0%	0	0.0%
Q18	72	69.2%	29	27.9%	3	2.9%	0	0.0%	0	0.0%
Q19	69	66.3%	31	29.8%	4	3.8%	0	0.0%	0	0.0%
Q20	74	71.2%	27	26.0%	3	2.9%	0	0.0%	0	0.0%
Q21	55	52.9%	36	34.6%	12	11.5%	1	1.0%	0	0.0%
Q22	62	59.6%	33	31.7%	9	8.7%	0	0.0%	0	0.0%
Q23	52	50.0%	42	40.4%	9	8.7%	0	0.0%	1	1.0%
Q24	54	51.9%	40	38.5%	9	8.7%	1	1.0%	0	0.0%
Q25	12	11.5%	11	10.6%	31	29.8%	31	29.8%	19	18.3%
Q26	46	44.2%	33	31.7%	18	17.3%	4	3.8%	3	2.9%
Q27	52	50.0%	36	34.6%	14	13.5%	1	1.0%	1	1.0%
Q28	40	38.5%	38	36.5%	22	21.2%	3	2.9%	1	1.0%
Q29	43	41.3%	37	35.6%	22	21.2%	1	1.0%	1	1.0%
Q30	40	38.5%	29	27.9%	26	25.0%	5	4.8%	4	3.8%
Q31	14	13.5%	34	32.7%	36	34.6%	15	14.4%	5	4.8%
Q32	13	12.5%	33	31.7%	40	38.5%	11	10.6%	7	6.7%
Q33	12	11.5%	40	38.5%	44	42.3%	7	6.7%	1	1.0%
Q34	21	20.2%	35	33.7%	34	32.7%	10	9.6%	4	3.8%
Q36	16	15.4%	29	27.9%	46	44.2%	9	8.7%	4	3.8%
Q38	53	51.0%	39	37.5%	11	10.6%	1	1.0%	0	0.0%
Q40	69	66.3%	26	25.0%	9	8.7%	0	0.0%	0	0.0%

2017年

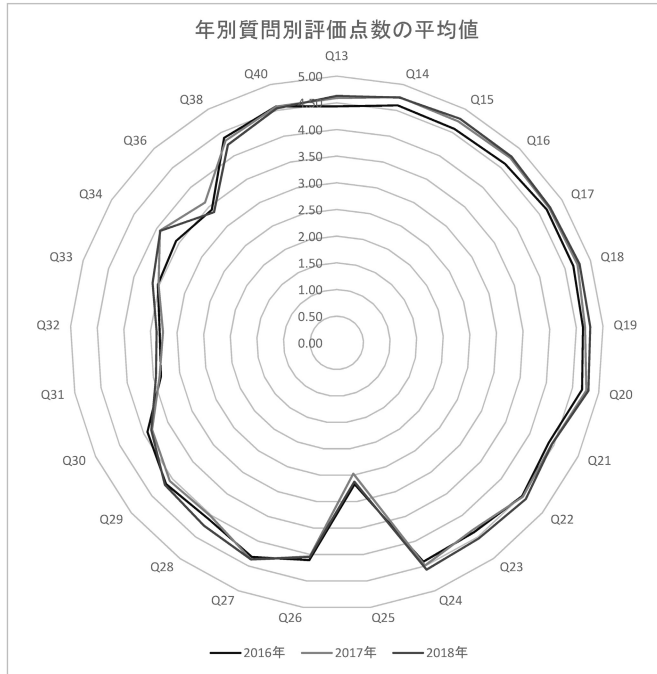
	評価「5」の人数		評価「4」の人数		評価「3」の人数		評価「2」の人数		評価「1」の人数	
Q13	70	60.3%	35	30.2%	5	4.3%	0	0.0%	0	0.0%
Q14	87	75.0%	20	17.2%	2	1.7%	1	0.9%	0	0.0%
Q15	88	75.9%	16	13.8%	5	4.3%	1	0.9%	0	0.0%
Q16	87	75.0%	19	16.4%	4	3.4%	0	0.0%	0	0.0%
Q17	83	71.6%	23	19.8%	4	3.4%	0	0.0%	0	0.0%
Q18	86	74.1%	21	18.1%	2	1.7%	1	0.9%	0	0.0%
Q19	81	69.8%	22	19.0%	6	5.2%	1	0.9%	0	0.0%
Q20	90	77.6%	14	12.1%	6	5.2%	0	0.0%	0	0.0%
Q21	66	56.9%	29	25.0%	14	12.1%	1	0.9%	0	0.0%
Q22	65	56.0%	38	32.8%	7	6.0%	0	0.0%	0	0.0%
Q23	49	42.2%	50	43.1%	10	8.6%	1	0.9%	0	0.0%
Q24	61	52.6%	42	36.2%	7	6.0%	0	0.0%	0	0.0%
Q25	9	7.8%	8	6.9%	28	24.1%	46	39.7%	19	16.4%
Q26	49	42.2%	32	27.6%	16	13.8%	10	8.6%	3	2.6%
Q27	60	51.7%	33	28.4%	12	10.3%	4	3.4%	0	0.0%
Q28	44	37.9%	35	30.2%	21	18.1%	9	7.8%	1	0.9%
Q29	51	44.0%	29	25.0%	19	16.4%	8	6.9%	3	2.6%
Q30	38	32.8%	32	27.6%	27	23.3%	9	7.8%	4	3.4%
Q31	15	12.9%	40	34.5%	32	27.6%	18	15.5%	5	4.3%
Q32	12	10.3%	31	26.7%	47	40.5%	14	12.1%	6	5.2%
Q33	17	14.7%	40	34.5%	39	33.6%	8	6.9%	5	4.3%
Q34	34	29.3%	45	38.8%	22	19.0%	7	6.0%	2	1.7%
Q36	28	24.1%	39	33.6%	24	20.7%	10	8.6%	9	7.8%
Q38	58	50.0%	38	32.8%	9	7.8%	2	1.7%	3	2.6%
Q40	75	64.7%	27	23.3%	5	4.3%	2	1.7%	1	0.9%



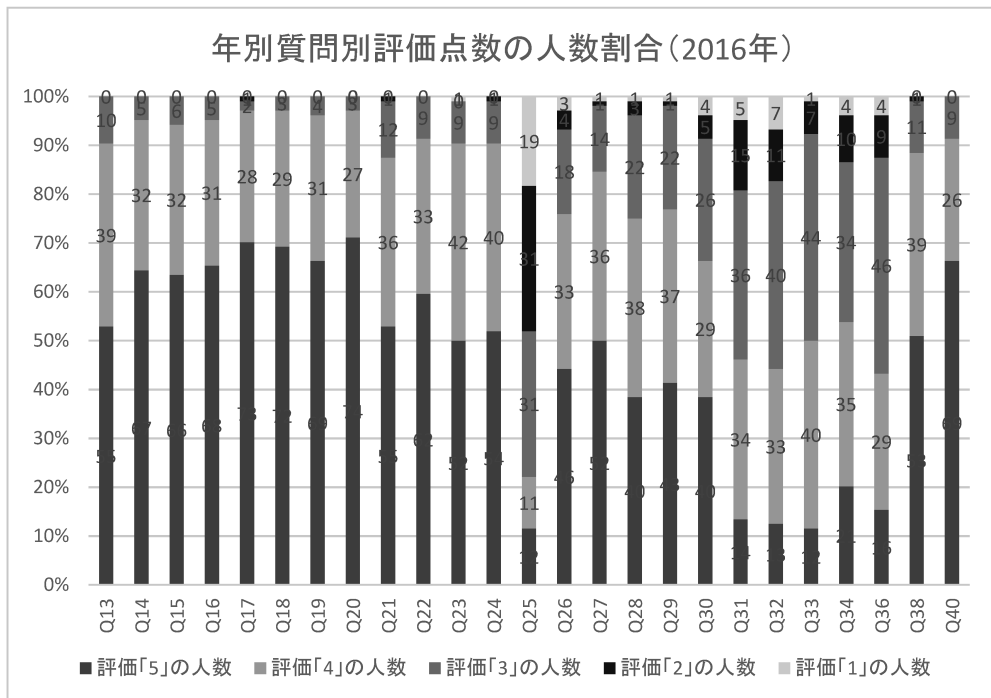
2018年

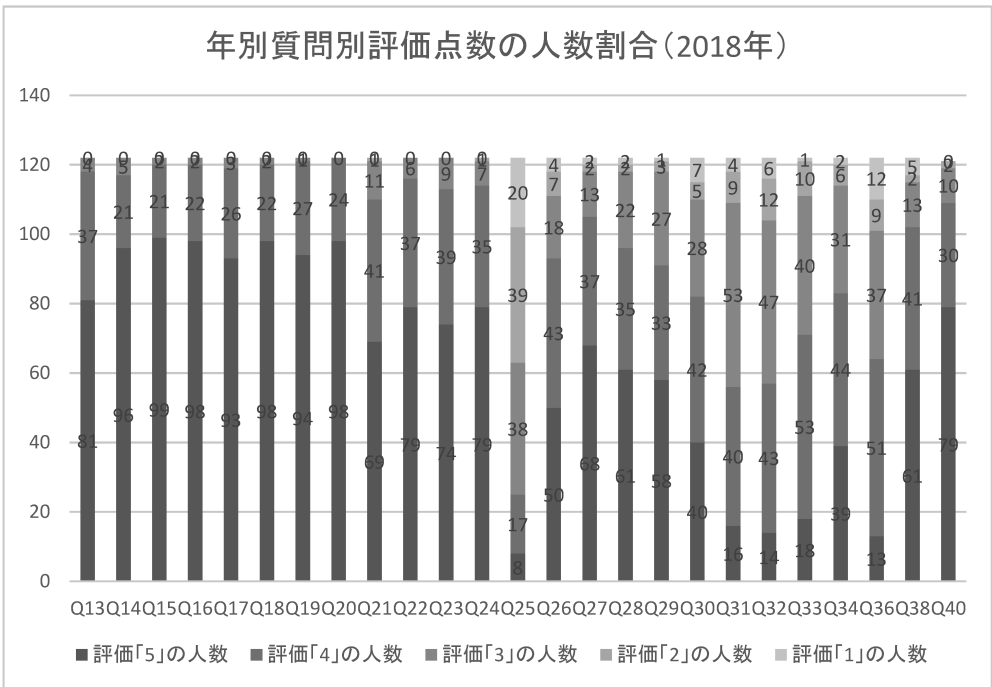
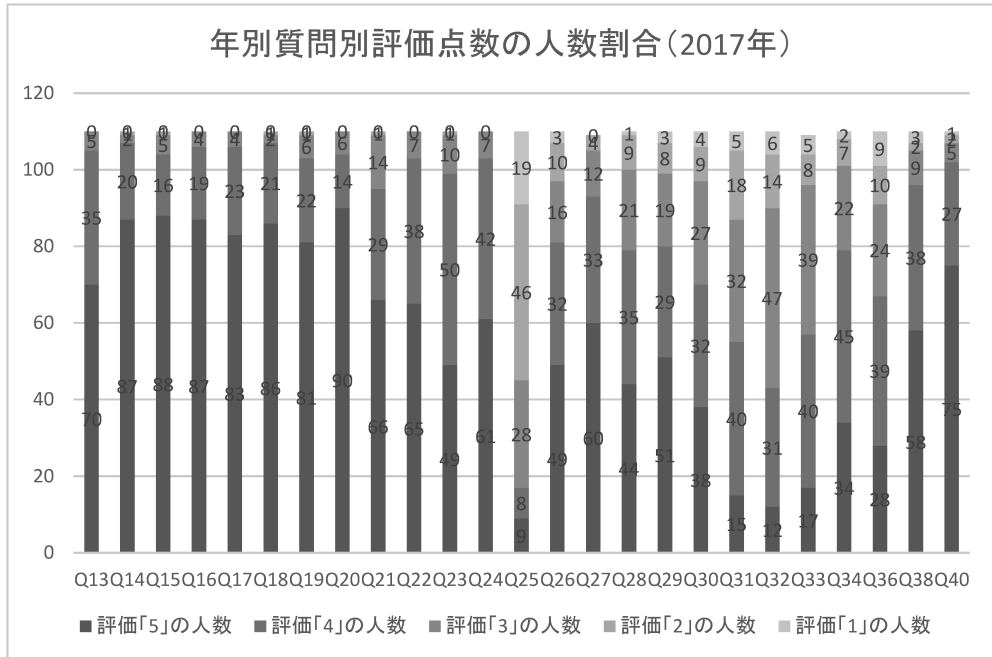
	評価「5」の人数		評価「4」の人数		評価「3」の人数		評価「2」の人数		評価「1」の人数	
Q13	81	55.9%	37	25.5%	4	2.8%	0	0.0%	0	0.0%
Q14	96	66.2%	21	14.5%	5	3.4%	0	0.0%	0	0.0%
Q15	99	68.3%	21	14.5%	2	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
Q16	98	67.6%	22	15.2%	2	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
Q17	93	64.1%	26	17.9%	3	2.1%	0	0.0%	0	0.0%
Q18	98	67.6%	22	15.2%	2	1.4%	0	0.0%	0	0.0%
Q19	94	64.8%	27	18.6%	1	0.7%	0	0.0%	0	0.0%
Q20	98	67.6%	24	16.6%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
Q21	69	47.6%	41	28.3%	11	7.6%	1	0.7%	0	0.0%
Q22	79	54.5%	37	25.5%	6	4.1%	0	0.0%	0	0.0%
Q23	74	51.0%	39	26.9%	9	6.2%	0	0.0%	0	0.0%
Q24	79	54.5%	35	24.1%	7	4.8%	1	0.7%	0	0.0%
Q25	8	5.5%	17	11.7%	38	26.2%	39	26.9%	20	13.8%
Q26	50	34.5%	43	29.7%	18	12.4%	7	4.8%	4	2.8%
Q27	68	46.9%	37	25.5%	13	9.0%	2	1.4%	2	1.4%
Q28	61	42.1%	35	24.1%	22	15.2%	2	1.4%	2	1.4%
Q29	58	40.0%	33	22.8%	27	18.6%	3	2.1%	1	0.7%
Q30	40	27.6%	42	29.0%	28	19.3%	5	3.4%	7	4.8%
Q31	16	11.0%	40	27.6%	53	36.6%	9	6.2%	4	2.8%
Q32	14	9.7%	43	29.7%	47	32.4%	12	8.3%	6	4.1%
Q33	18	12.4%	53	36.6%	40	27.6%	10	6.9%	1	0.7%
Q34	39	26.9%	44	30.3%	31	21.4%	6	4.1%	2	1.4%
Q36	13	9.0%	51	35.2%	37	25.5%	9	6.2%	12	8.3%
Q38	61	42.1%	41	28.3%	13	9.0%	2	1.4%	5	3.4%
Q40	79	54.5%	30	20.7%	10	6.9%	2	1.4%	0	0.0%

図表5 年別質問別評価点数の平均値



図表6 年別質問別評価点数の人数割合





(2) 自由記述の回答項目

自由記述で回答を求める質問は5項目ある。まず、「Q35」である。これは前質問項目の「Q34. 教員2人の考えや保育観の違いを感じた」の理由を聞いた質問である。2016年では104の回答中85、2017年では110回答中103、2018年では122回答中112の記述があり、3ヵ年とも「Q34」で低い評価をした学生は、「わからない」、「感じなかった」、「似ている」と多く記述回答している。反対に高く評価した学生は「助言（アドバイス）」、「考え方」という2点で違いを感じると多く回答していた。

次に「Q37」、「Q39」である。これらはそれぞれ前質問項目で「Q36. 6月の教育実習でこの講義内容は活かした」、「Q38. 9月の保育実習にこの講義内容を活かしたい」を聞いており、その内容をそれぞれ自由記述で回答している。それぞれの記述回答にあるキーワードを抽出し、比較しやすいように表したものが図表7である。今回は3ヵ年で比較するためにあえて、同じキーワードで抽出を行っている。

図表7 年別「Q37」「Q39」のキーワード増減表

2016年

	Q37 (6月実習に対して)	Q39 (9月実習に対して)	増減
声かけ・子どもへの対応	7	13	+6
造形活動	2	1	-1
指導案	8	3	-5
模擬保育	16	56	+40
絵本	7	1	-6
保育の導入・流れ	8	13	+5
乳幼児の発達特性	4	15	+11
子どもの主体性	1	0	-1
日誌	3	1	-2
チーム制	1	2	+1
教員の助言	0	12	+12
心構え	0	1	+1

2017年

	Q37 (6月実習に対して)	Q39 (9月実習に対して)	増減
声かけ・子どもへの対応	12	10	-2
造形活動	7	4	-3
指導案	13	5	-8
模擬保育	9	27	+18
絵本	3	2	-1
保育の導入・流れ	8	7	-1
乳幼児の発達特性	3	12	+9

子どもの主体性	2	2	0
日誌	1	0	- 1
チーム制	0	2	+ 2
教員の助言	1	13	+12
心構え	2	0	- 2

2018年

	Q37 (6月実習に対して)	Q39 (9月実習に対して)	増減
声かけ・子どもへの対応	19	15	- 4
造形活動	4	3	- 1
指導案	9	1	- 8
模擬保育	3	40	+37
絵本	5	3	- 2
保育の導入・流れ	11	5	- 6
乳幼児の発達特性	4	15	+11
子どもの主体性	2	3	+ 1
日誌	1	1	0
チーム制	1	7	+ 6
教員の助言	0	11	+11
心構え	3	1	- 2

そして「Q40. この講義は教員2人体制がよいと思う」という質問に対する理由は「Q41」である。同様に、その記述回答から同じキーワードを抽出したものが図表8である。

図表8 年別「Q41」の回答キーワード表

Q41	2016年	2017年	2018年
2人の違う意見・助言が聞けることができる	71	46	61
安心できる・頼りがいがある	7	2	3
教員の経験	6	3	8
チーム制を学べる	6	17	24
教員の保育観を学べる	6	15	25
わかりやすい・聞きやすい	4	7	6
担当教員を増やしてほしい	3	0	1
楽しい	2	3	0
自由に取り組みやすい	1	1	0
質問しやすい	1	1	0

最後に「Q42. この講義で卒業後に活かせる内容を思いつく限り答えてください」である。この回答記述から同様にキーワードを抽出したものが図表9である。ここでは「模擬保育」という回答を「教員の模擬保育」と「学生の模擬保育」に区別した。

図表9 年毎の「Q42」の回答キーワード表

Q42	2016年	2017年	2018年
教員の模擬保育	36	32	37
学生の模擬保育	16	37	47
保育観・保育のアイデア	24	19	31
言葉がけ・援助・導入などの技術論	21	32	46
指導案・日誌	10	21	13
乳幼児の発達特性	8	8	32
保育への心構え	5	4	14
教材研究	4	3	17
複数担任・チーム制	3	8	23
その他	4	0	1

## 5. 調査結果からの考察

### (1) Q13～24について

今回のアンケート調査から、「Q13. この講義の内容はわかりやすかった」、「Q14. 講義の内容は自分のためになった」、「Q15. 講義の内容はとても活かせる」、「Q16. 講義の内容はとても参考になった」、「Q17. 教員の模擬保育の内容はわかりやすかった」、「Q18. 教員の模擬保育は自分のためになった」、「Q19. 教員の模擬保育はとても活かせる」、「Q20. 教員の模擬保育はとても参考になった」、「Q21. 模擬保育への助言はわかりやすかった」、「Q22. 他人の模擬保育は自分のためになった」、「Q23. 他人の模擬保育はとても活かせる」、「Q24. 他人の模擬保育はとても参考になった」、以上の質問項目は図表2・3・4から、3ヵ年とも評価が高い結果となった。これらの質問の回答の評価は、全体平均の「4.2」を大きく超えており、中央値もほぼ全てで「5」を、また最小値もほぼ全てで「3」となっている。そして回答した人数の割合からも「5」と回答した学生は半数（50%）以上いる。この結果から、この「保育内容（総論）」という授業は学生にとって大きな学びとなっていることを示している。まず、「Q13～16」ではこの授業について質問しているが、これらの項目は上記の通り評価が高い。これらから、この授業内容が学生にとって価値のある授業であったことがわかる。そして、「Q17～20」の回答からも教員ら（筆者ら）が実施した模擬保育も大きな成果となっている。さらに、「Q21～24」の回答からも自分以外の学生が実施した模擬保育がとても参考になっていることがわかる。これらから、「模擬保育」というこの授業での主たる活動内容が学生にとって大きな成果であり、学びになっていることを示している。

また3ヵ年を通してみると評価が、上昇傾向にある。受け手である学生が変わっているにも関わらず、上昇しているということは授業内容も洗練され、学生自身にとっても分かりやすく、学びが多いと思われる。その理由は考えるに、毎年、授業が開始される4月前と毎時の授業終わりに、2人の教員（筆者）で昨年の課題や反省を挙げ、少しずつではあるが、授業内容を改善している成果であると推察する。これもPDCAサイクルの一つと考えれば、学生へのPDCAサイクルを提示する

際のいい教材になるのではないだろうか。実際にPDCAサイクルを実施するのではなく、受けてみるということも授業手法の一つとして大いに成果があると思われる。

## (2) Q25～29について

ここまでの質問に対する評価は高かったが、「Q25～29」は「Q13～24」に比べると平均値、中央値共に3ヵ年とも低いものとなっている。特に「Q25. 模擬保育は簡単だった」という質問に対しては平均値、中央値共に低く、3ヵ年とも他の質問の結果と比べて顕著である。回答数も割合からも全質問項目の中で最も評価が低い結果となった。この結果及び、前述した結果からは、筆者らの模擬保育や他人の模擬保育は参考になるものの、やはり自分がするとすると困難に感じていることがわかる。ただ、「Q26. 実施した模擬保育への助言はわかりやすかった」、「Q27. 実施した模擬保育は自分のためになった」、「Q28. 実施した模擬保育はとても活かせる」、「Q29. 実施した模擬保育はとても参考になった」という4つの質問項目は「Q25」に比べると3ヵ年とも高い結果となっている。これらのことから、自分が行う模擬保育に対して困難だと感じるほど後ろ向きになっているわけではない。またこの授業の中で、保育業務のチーム制を学ぶというねらいもあって、模擬保育のグループ構成を筆者らがランダムに組んでいるが、学生の中で人間関係が希薄な者と組む場合もあるので、学生が困難に感じていることも大いにあると考えられる。ただ、そのねらいを筆者らが授業内で伝えきれていないことで、学生達の意識が変わらず、希薄なまま、模擬保育を実施している可能性がある。本来の意味でのチーム制を学び、実施するという点では目的を達成できていない。このため、チーム制に関する授業内容を改善しなければならない。またこれは推察に過ぎないので、この点も含めた質問アンケートにする必要がある。

## (3) Q30～33、Q36～39について

この授業を受けての心境等の変化について聞いた。保育者養成校の学生は実習に対して大きな期待と同じ程度のとても多くの不安を抱いている<sup>5)</sup>。その数々の不安の中でも、この授業で実施する模擬保育の様に、実際の保育現場で乳幼児を対象に保育活動を実践したり、その保育現場での担任保育者と連携を図ったりと、プロの保育者としての立ち振る舞いが求められる。また本学で実施されている学外実習の期間が、この「保育内容（総論）」と重なっていることもあって次のような質問を実施した。「Q30. 保育系の職に就くことに前向きになった」、「Q31. 実習に対しての不安が減った」、「Q32. 他の授業に対する気持ちが高まった」、「Q33. 他の授業の関連性を感じた」、これらの質問の回答結果は、平均値は全体平均値や中央値を3ヵ年とも下回っており、他と比べると若干低い結果となっている。特に卒業後の進路に影響される、保育系への就職については前向きになれなかった学生、つまり評価を「1」または「2」と答えた学生は約3割となり、学生全体の1/3は後ろ向き、または否定的であるということになる。そしてこの結果は3ヵ年とも大きな変化がない。この結果は筆者らにとって大きな課題となる。本研究の主たる目的の「保育の質の向上」以前の問題である

からだ。東京都の調査では資格取得後、保育関係の職に就かないものは20.3%いると報告している<sup>6)</sup>。また本校でも保育関係の職に就かない学生が年々増えている。毎年、保育士不足が問題視されている現在、保育関係の職に就くことへの不安等を取り除くことは大きな課題であるが、近年、入学時のアンケートで、保育関係への職に就く思いもなく入学している学生も増えている<sup>7)</sup>。このことから「保育内容（総論）」という一つの科目だけで考える問題ではない。保育関係の職に就くことへの不安等を取り除き、前向きになれるようにするには授業を越えた教員と学生の信頼関係が必要と考えられる。保育現場を意識した授業であるものの、それだけでは何ともし難い課題であるとする。

他の質問項目では、「Q32・33」の結果から3ヵ年とも他の授業科目への関連性を理解していないことがわかる。このことは毎年、意識し、授業展開を実施したつもりだが、結果が出ていないということになる。前回の論稿でも記述したが、幼児教育学・保育学とは様々な領域からなる学問であるので、保育者とは多種多様の専門的知識や技術が求められている。そして、それらの専門知識や技術を横断的に学び、習得することが保育者養成校での学びとして求められている。しかし、この結果から学生は横断的な学びができない、またはできにくいということがわかる。単に担当している科目を学生に教えるのではなく、他の科目や専門的領域まで幅広く、横断的に学ぶことができるような授業展開を実施するには学科全体を挙げて、取り組まなければならない。

「Q36～39」の結果もみていく。「Q36. 6月の教育実習でこの講義内容は活かせた」、「Q37. それはどのような点ですか」、「Q38. 9月の保育実習にこの講義内容を活かしたい」、「Q39. それはどのような点ですか」という設問に対する自由記述での回答を、図表7において内容をキーワードとして抽出し、個数の増減を捉えている。「Q36・37」と「Q38・39」では「教育実習で活かせた」と「保育実習で活かしたい」という多少の設問の文言に違いはあるが、3ヵ年とも、教育実習ではあまり活かすことができず、保育実習ではしっかりと活かしたいという思いが感じられる。またこの結果では年毎に若干の差異が見られるが、これには理由があり、そこを加味して考えると、この結果も大きな変化はないように感じる。その理由は後述する。

図表10 授業展開と学外実習の時期

時期	授業内容	学外実習
4月～5月	筆者らによる講義 筆者らによる模擬保育	
6月上旬	授業なし	2週間の学外実習 教育実習Ⅱ（幼稚園）
6月下旬～7月	学生による模擬保育	
9月上旬		2週間の学外実習 保育実習Ⅱ（保育所） 保育実習Ⅲ（福祉施設） <sup>8)</sup>



上記の様に、学生による模擬保育が実施されるのは「Q36」の6月での教育実習Ⅱの終了後である。よって、6月での実習ではこの授業内容を活かしきれていない学生が多かったと思われる。その反面、他人や自分の模擬保育が終了した9月での保育実習Ⅱ・Ⅲでは活かしたいと考えているため「Q38」の評価は高くなったのである。しかし、年毎で差異が出た理由として、9月の保育実習Ⅱ・Ⅲは2018年より、選択必修科目に変更されたことが挙げられる。これにより保育実習Ⅲを履修した学生は152人中31名いるため、その学生達は福祉施設での9月の実習を意識している。「保育内容(総論)」で展開している授業内容は保育現場を意識しているものの、保育実習Ⅲで赴く福祉施設には重点を置いていない。そのため、保育実習Ⅲを履修している学生にとっては「Q38」の質問に対して低く答えてしまう。また学科の規定<sup>9)</sup>で、単位不足の関係により、6月と9月の学外実習に参加していない学生も2016年は3人、2017年は9人、2018年は25人と増加している。そのため、学外実習を意識していない学生もいるため、この質問の結果からは大きな考察はしにくい。この点に関しては質問アンケートを改善していかなければならない。

しかし、自由記述のキーワードの増減から年毎での差異が見られる。「模擬保育」や「教員からの助言」という項目で3ヵ年とも増えていることから、そこに大きな学びがあり、学外実習に活かした、または活かしたいという思いが推察される。3ヵ年での変化で見えていくと、「乳幼児の発達特性」や「チーム制」に変化があり、2018年だけでみると「心構え」も大きな増加がある。「乳幼児の発達特性」に関しては授業を、できるだけ具体的な内容にしていってという改善との結果と考える。以前より、筆者らの模擬保育が高尚過ぎたのか、あるいは内容や説明、目的等が理解されていないのか不明だが、学生が活かしきれていないという問題を考えていた。そこで授業内容を簡単にするのではなく、出来る限り具体的にすることに努めたことにより、学生が授業内容の「乳幼児の発達特性」に意識を向けた結果だと思われる。また同様に「チーム制」、「心構え」も改善した結果だと考える。特にこの2点に関しては、毎時の授業内容で重点的に実施した。そして学生もこの2点への意識が増大したのだろう。ある意味では成果として挙げられるが、意識が上がっただけで結果が伴ったかという点では疑問が残る。この点も大いに反省しなければならない。

#### (4) Q34・35・40～42

「Q34. 教員2人の考えや保育観の違いを感じた」での評価だが、2016年は低かったが2017年と2018年は上昇している。これは2016年の反省から「保育観」に関して意識的に毎時、授業内容に盛り込んでいった結果が数値に表れていると考えられる。その理由を聞いた「Q35」の自由記述で、2016年では違いを感じず、似ているという記述や、わからないという記述も多くあったが、2017年と2018年では筆者の「保育観」の違いを感じている学生が少なからず増えている。また具体的な違いを記述する学生もいた。この点に関しては驚きである。質問項目の内、学生が教員の考え方に違いや差を感じているが保育観に関しての記述が、2017年ではほぼないことから保育観の違いを感じていなかったのに対して、2017年と2018年では違いを感じるようになった。このような学生の理

解の成長は大いに喜ばしい。本来保育観そのものを理解できていない可能性が高かったので、「保育観とは何か」ということを授業内容に盛り込む改善が功を奏した。しかし、学生はまだ理解しきれていない状況である。これは本研究のもう一つの主目的である複数担任（チーム制）にも関わっている。前回の論稿に論述したように、複数担任（チーム制）における課題である保育者同士の連携の困難さは、その保育者同士の保育観にも起因している。しかし、保育観を理解していない状況で保育現場に就くと、他の保育者の保育観そのものを理解できず、そして受け入れることができないように感じてしまうと考える。前述したように模擬保育を実施する上での困難さは人間関係の希薄さが大きな要因だが、保育士同士の保育観の理解は、信頼関係の向上という点からも必要不可欠である。このように保育観の理解がないまま、保育現場に就くことは人間関係という理由での退職を引き起こし、保育士不足の問題を加速してしまう。他人の保育観に触れるということは、今回の授業で筆者らや多くの学生が実施した模擬保育に触れることと同義と考え、学生の模擬保育を大いに実施した。筆者らの模擬保育や他人の模擬保育を大いに参考にして、保育観を受け入れることが、保育者同士の連携の向上に繋がると考えられる。

「Q40. この講義は教員2人体制がよいと思う」では3ヵ年とも回答の評価が高い。平均値や中央値も高く、この授業での2人体制は大きな成果となっている。その理由を聞いた「Q41」では図表8からもわかるように「筆者らの違う意見・助言」が最大の要因であろう。また「チーム制を学べる」、「教員の保育観を学べる」という記述は年々、上昇している。このことから、やはりチーム制と保育観に対しての意識や理解が向上していると思われる。前述したように、筆者らや他の学生達の保育観に触れることが大切である。

最後に、「Q42. この講義で卒業後に活かせる内容を思いつく限り答えてください」と質問した自由記述の回答が図表9である。ここでも多く記述されていたのが3ヵ年とも「模擬保育」である。だが、「保育観・保育のアイディア」、「言葉がけ・援助・導入などの技術論」、「乳幼児の発達特性」、「保育への心構え」、「教材研究」及び「複数担任・チーム制」に関しては上昇している。まず、この結果も前述の通り、「模擬保育」は大きな成果となっている。学生にとって他人の模擬保育や自分の模擬保育の経験が財産となり、今後活用されていくと考えられる。また、筆者らの授業改善で、重点を置いた項目に関しては評価が高くなっている。授業改善の成果がみられているが、他人の模擬保育や自分の模擬保育という経験を学生がどのように活かすのか、という点では不明である。この点に関しても質問アンケートの変更が必要である。

## 6. おわりに

まず授業改善の成果がでたことは評価に値する。だが、反省点や今後の課題は多くあるため、次に挙げる。

### (1) アンケート実施の時期と質問内容の変更

アンケートを3ヵ年とも9月の学外実習直前に実施しているが、今後は9月実習終了後に実施する。9月の学外実習においてどう活かしたのかという結果の調査が必要と考えられる。また実習に対してばかりではなく、卒業後も意識するために、卒業直前、または卒業後にも実施することを検討したい。また質問内容については、何度も前述しているが、もっと具体的な質問項目に変更し、自由記述を増やす予定である。欠損値が高いことも問題だが、現在の質問では表面的な点しか見えず、また自由記述であると多義的な結果も見えてくるからである。特に「Q25」の評価が低い理由を探るにも自由記述の質問方法は効果的であろう。

### (2) 授業運営及び内容の改善と増加

授業内容としては一定の成果が出ているものの、技術中心になっていることが否めない。保育の質の向上を目指すのなら、もっと心構えにも重点を置いた内容を増加させていく必要がある。また他の科目とも連携をとり、横断的な授業運営にしていくことが肝要である。本研究での主目的である「チーム制」、「模擬保育」、「保育観」においてだが、学生のアンケート調査からは、どちらも学びとして向上してはいるが、今後どう活かすのかという具体的な点について学生は理解できていない、または考えがまとまっていないと思われる。そういった意味でも単に「チーム制」、「模擬保育」、「保育観」が重要であるというような短絡的な授業ではなく、具体性をもった授業内容にしていく。

### (3) 学生の模擬保育の改善

「模擬保育」が大きな学生の学びになり、成果であったことは3ヵ年とも間違いない。しかし困難を感じているのも同様である。その一番の要因は学生のグループ構成と推察するので、組む人との関係性を向上させるか、または関係性はできている者で組むかを検討する。後述は具体的にはランダムに指定するのではなく、学生自身でグループを構成することである。これを今まで実施してこなかったのは、元からある関係性ではなく、新規で関係性を築くことが保育現場でのチーム制での保育に近いと考えていたからである。しかし、保育現場と学生に置かれている状況は全く違う。日中、常にチームで動いている保育現場と違うし、また学生間には上下関係もない。そういった点からグループ構成に関しては検討する。また模擬保育の保育内容をもっと限定化していく。今まで、こちらから想定するように指示を出したのは「子どもの年齢」、「時期」、「保育内容のジャンル」であったが、学生としてはここから模擬保育の保育内容を立案することは困難ではないかと考えている。そこでもっとこれらを限定化していく。そして、模擬保育の受け手である「子ども役」に関して、乳幼児期の発達理論を深め、子どもの具体像を示し、指導していく。というのも模擬保育を実施する対象者は同世代の学生であるため、どうしても子どもとの差異を感じ、模擬保育を実施する者、子ども役を演じる者、両者が困難になっていると思われる。受け手である子ども役をもっと上手く演じることができれば、模擬保育は実施しやすくなるだろうし、また乳幼児の発達特性への意識も

向上すると考えられる。

最後に、今回の研究及び授業が保育の質の向上につながったかどうかという点では、相変わらず不明である。そもそも保育の質の向上の定義が曖昧であることもあるが、主観的な面と客観的な面もあると言える。対象である学生が、保育の質の向上を実感しても、他者からそう捉えられないこともある。また保育の質の向上を数値化することも簡単なことではない。しかし、模擬保育という経験、筆者らの授業や助言、考え、そして筆者らや学生の保育観などの多くのものが、学生の糧となり、財産となり花開くことを願っている。今後も本研究を続けると同時に、もっと深めることによって、保育者養成校でできる保育の質の向上に貢献したい。

#### 注・参考文献

- 1) 大嶋健吾, 芝田圭一郎. 「保育者養成におけるチーム制実践的演習授業について(1)」。大阪城南女子短期大学紀要第51巻. 2016, p81-98.
- 2) 本研究では保育者を幼稚園教諭・保育士・保育教諭を指す
- 3) 本研究では保育現場を幼稚園・保育所・認定こども園を指す
- 4) 本学では2018年度より「保育実習Ⅱ(保育所)」、「保育実習Ⅲ(福祉施設)」のどちらかを履修選択するように変更になった
- 5) 大阪総合保育大学総合保育研究所・保育指導のプロセス研究会「実習生の保育案作成・責任実習の状況についての調査研究—実習園の評価と学生自身の評価の比較検討—」日本保育学会第70回大会研究発表論文集. 2017.
- 6) 東京都福祉保健局. 東京都保育士実態調査報告書. 2014.  
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2014/04/DATA/60o4s201.pdf> (参照2016-12-26)
- 7) 大阪城南女子短期大学 IR室第1回報告書, 2017.
- 8) 保育実習Ⅲで赴く福祉施設とは「児童養護施設」「乳児院」「障害児支援施設」の3種である
- 9) 大阪城南女子短期大学総合保育学科には、1年次開設の必修科目の内、一つでも単位不可になると2年次の学外実習に参加できないという履修上の規定がある

(しばた けい ちろう : 講師)

(おおしま けんご : 講師)